

北海道における子どもの住意識向上の取組み

北海道立総合研究機構 北方建築総合研究所
馬場 麻衣

●事業目的●

明日の住まい手・作り手となる子どもを対象として住まいに関する意識を育むこと。そのために、学校や地域における住まいづくり学習、まちづくり学習等の活動を支援する。

子どもの住意識向上を総合的に進めることにより、日頃から住まいの重要性を認識することのできる“人”の確保、育成を図る。

事業の経緯

<問題意識>

住宅の性能が向上しても、住まい手の意識が変わらないと住環境はよくなる



授業支援や中高の住教育実態調査から
建築分野の専門家からみた住教育プログラムの必要性が明らかとなる (H8年度～)

住まいとまちの体験学習プログラム「ただいま」の発行 (H13年度)

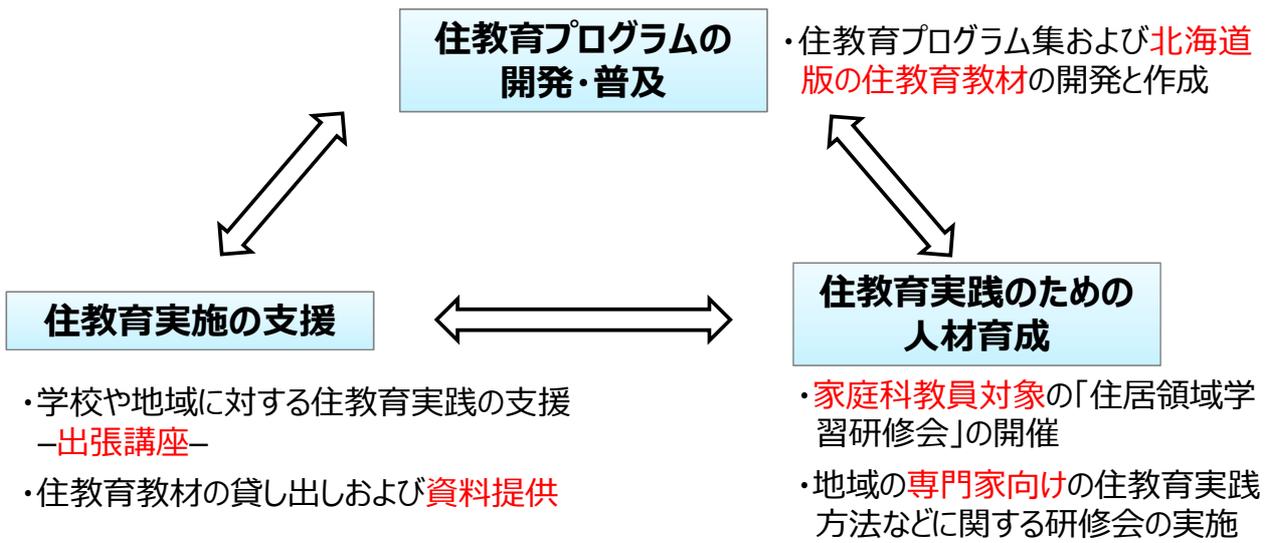
プログラムの普及

住教育の支援

人材の育成



事業概要



事業費：北海道建設部住宅局建築指導課からの事業委託
年間約100万円（H15年～H25年）

住教育実施の支援・普及 —出張講座—

- ・出張講座 … 小・中・高校における授業支援
- ・授業案指導 … 教員からの個別相談
- ・講師派遣 … 自主的研修会等における講義

●ねらい●

- ・住教育の普及
- ・さらなるニーズの掘り起こし



住居領域学習研修会の開催へ



住教育プログラムの開発・普及

●テキスト●

住まいとまちの学習プログラム「ただいま」
 住まいとまちの学習プログラム2
 「北海道の 住まい まち暮らし」

●教材●

北方型住宅パーパークラフトなど



※希望する学校に無償配布

HPにPDFで公開

(<http://www.hri.pref.hokkaido.jp/provide/gijutu.html>)

住教育プログラム「北海道の 住まい まち暮らし」

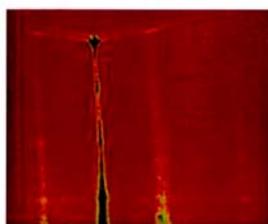
【暖房の考え方】

最近の住宅は、断熱や気密の性能が高く、住宅の中の熱が外に逃げにくいので、少しのエネルギーで住宅内を快適な温度にすることができます。近ごろは全室暖房する家が増え、暖房機器が各部屋の窓の下につけられるようになりました。しかし、今までの住宅のように必要な部屋だけを暖房すると、一部の部屋だけが暖かくなり、寒い部屋から冷たい空気が足元に流れてくるので快適な住宅になりません。

快適に暖かく暮らすために、家の中から、寒い部分や寒い部屋をなくす必要があります。トイレや浴室、玄関など、以前は暖房されずに寒かった部屋を暖かくすることは、結露の心配もなくなるだけでなく、家族の健康にも役立ちます。

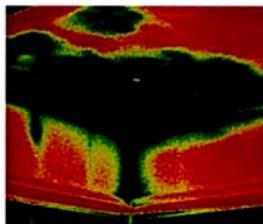


断熱の良い家と悪い家 (赤外線カメラで撮影した壁と天井)



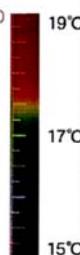
●断熱の良い家

断熱材が角まできちんと入っているため、壁も天井も、温度が低いところがほとんどない



●断熱の悪い家

断熱材がきちんと入っていないため、天井の角の温度が低くなっている



ダウンドラフト (窓の冷気流)

室内で暖まった空気が、窓面で冷やされると下向きの冷たい空気の流れが生まれやすくなります。これをダウンドラフトといいます。すきま風がない気密のよい住まいでも、窓の断熱性能がよくないとダウンドラフトがおり、寒さを感じてしまうことがあります。



ダウンドラフトの仕組み

住教育プログラム「北海道の 住まい まち暮らし」

■収納の必要性

収納は快適な生活を送るのに必要です。収納が少ないと物が部屋や廊下にあふれ、部屋が狭くなり生活しにくくなるのと同時に、掃除がしづらく清潔をまもりにくいことが考えられます。

■冬の生活と収納



北海道の生活に必要な冬の荷物の例

各部屋では何を使って何を収納するのか、その大きさと量を考えて収納場所を確保することが重要です。特に北海道では冬の屋外で必要なスタッドレスタイヤやスキー、雪かき用具、冬用のくつなど、冬しか使わない物がたくさんありますので、車庫や玄関周りに収納する場所を確保したいものです。衣類もオーバーやセーターなど、かさばるものがたくさんありますので、十分な広さが必要になります。



■収納場所と収納物の大きさ

収納は、同じスペースが確保されていても、幅や奥行きによって収納できるものの大きさが変わります。どの部屋にどのようなものを収納するのか考えておく必要があります。



奥行	80cm	60cm	40cm	35cm
部屋	和室 寝室 客間	玄関ホール 主寝室 子ども室	玄関ホール 廊下 台所 洗面所	食堂 台所 主寝室 子ども室
収納するもの	ふとん 寝具 洋服ケースなど	洋服 コート 寝具など	日用品 日用品 古新聞 タオル 掃除用具	食器 調理器具 本 装飾品

収納の奥行と部屋・収納するものとの関係

住教育実践のための人材育成「住居領域学習研修会」

実績：延べ18回開催、述べ503名受講（道内小中高等学校 約2000校）

講師例；専門家（住まい・環境教育学会）、道内大学教員、

研修会受講者（現場教員）など

内容例；「自立生活のための住居学習」

「ペーパークラフトを活用した住居領域学習」

「結露発生のしくみ、保温箱実験」

「あなたならどうやって選ぶ？ - 住宅の立地や敷地を考える -」

「暮らしと景観 - 住宅地の街並み景観を考える -」



中学生向けの課題に挑戦



ペーパークラフトの活用



受講者（現場教員）の講義



街並み景観の色彩を学ぶ

講義内容例「自立生活のための住居学習」

指導案

1. 題材名「自立生活のための住居学習」

いずれは自立して一人暮らしをしますが、そのときの住まい選びを通して住まいに必要な機能や性能について考えます。また、家計のやりくりも含めて生活の設計を行います。

2. わらい

- (1) 生活が住まいにどのように関わっているか分かる
- (2) 自分の住要求をとらえ、住生活を営める能力を身につける

3. 学習の展開 (2~3時間)

階段	学習事項	学習の流れ	時間	指導上の留意事項
導入	居心地のよい住まいとは	・それぞれの暮らしの中から、居心地のよいという状況を思い出し、住みよい暮らしに求められる機能について考える。 ・人によって居心地の良さは、大切なことの違いを考える ・住まいの役割を整理する	0.5	・暮らしに必要な住まい・住環境の要素を分類、体系的に理解させる。 ・生活には様々な要求がある ・人によって住要求が違う
展開	一人暮らしの住まい	・進学、就職で一人暮らしを始めるとして自分の住まいを考える ・どんな生活行為が行われるか ・それを実現するプランを計画 ・借りるときの試算を行う	1.0	・どんな暮らしをしたいのを引き出す ・生活行為を空間化させる
まとめ	住まいと住要求	・生活設計の中で住居費を考える ・発表のような暮らしと住まいを計画したか	1.0	・生活が成り立つように支出のバランスを考えさせる。 ・その中で住居の位置づけを考えさせる ・人によって生活の重点が違う

4. 評価の視点

- (1) 住居の役割、機能が分かったか
- (2) 一人暮らしのイメージを持たせたか、それに基づく住まいが計画できたか
- (3) 生活設計の中で住まいを考えられるようになったか

14

指導案による模擬授業

- すぐに使えるものが求められる

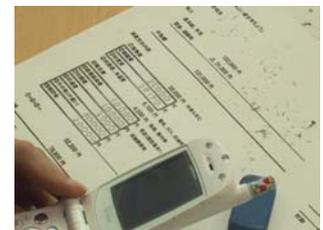
高校生にとっても身近なテーマ

住居単価積算表

項目	単価 (円)	単位	数量	金額	備考
基礎	住宅基本料金	17,000	1	17,000	屋根、ガス、照明など
住宅	住宅面積	1,000	m ²		全体
	築年数	△ 400	年		最大15年
	居住階数	780	階		
	駅までの距離(徒歩)	△ 400	分		最大15分
	駅までの距離(バス)	△ 700	分		最大15分
付加	トイレ	600	有		
	浴室	2,000	有		
	バストイレ別	1,000	有		バストイレが一緒の場合は20円
	収納	100	m ²		
	洗面台	500	有		
	シャワーブレードレッサー	1,000	有		
	オール電化	400	有		
	フローリング	1,200	有		
	南向き	400	有		
	バルコニー	800	有		
	出窓	400	有		
	エレベーター	800	有		
オートロック	500	有			
CATV	800	有			
合計				円	

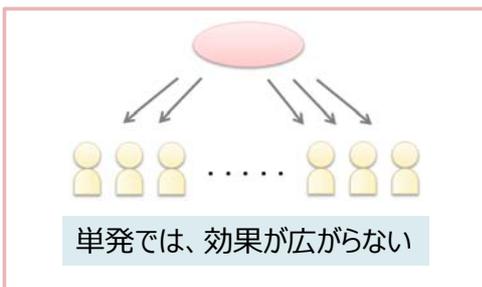
生活収支計算表

■収入		
基本給、手当	152,000 円	
税金、保険料	△ 21,000 円	
手取額	131,000 円	
■消費支出内訳		
①食物費	38,000 円	外食も含む
②被服費	円	
③住居費	円	
④光熱費、水道費	9,700 円	電気、ガス、灯油等
⑤衛生費	4,500 円	洗剤、薬代等
⑥娯楽費	円	電報、新聞代、受取料等
⑦交際費	円	結婚準備等
⑧交通費	円	
⑨その他の給(小遣い)	円	
⑩預貯金	円	
①+④+⑤	52,200 円	
支出合計	円	

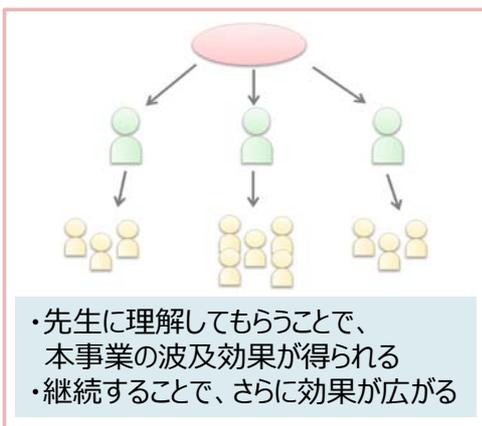


現在の事業展開

<直営で実施>



<人材育成>



<ネットワークの拡大>

支部一覧

小樽 札幌 岩内 恵庭 後志 石狩 北広島	古平 余市 千歳 空知	旭川 上富良野 富良野 北空知 留萌	宗谷 士別 名寄
苫小牧 函館 檜山 室蘭 日高	道北	道東	道南
	道央		
		中標津 釧路 十勝 紋別 美幌 斜里	根室 北見 遠軽 網走

(一社) 北海道建築士会HP (<http://h-ab.com/>) より

・建築士会のネットワークにより、全道での普及効果の拡大へ (H25~)

建築士会と行政の連携により、
子どもの住意識向上の取組みを進めている

北海道の経験から

(1) 住教育の支援

住教育支援については、既に今年度から本事業において北海道建築士会女性委員会により高等学校家庭科における住教育支援が行われている。これまでの本事業では、年間数件の出張講座や講師派遣を行うにとどまっていたが、**建築士会のように全道にネットワークがあれば**、例えば振興局単位で地域の建築士が授業支援を行うことが可能となり、**普及効果の増加が見込まれる。**

(2) 人材育成

一方で、専門家の支援にはやはり限界があり、**現場の教員が育成されること**により普及効果や子どもの**住意識向上が図られる**と考えられる。将来的には建築士会女性委員会においても、教員を育成するような体制づくりが求められる。また、既に道内には、北海道立教育研究所や住まい・環境教育学会による住教育に関する研修会が行われており、それらへの参加の呼びかけ等も有効である。

(3) 住教育プログラム

教員からは、**授業ですぐに活用できる指導案や教材が求められている。**本報告書で紹介した住教育プログラムを例えばウェブ上などで誰もが使えるように公開することで、更なる住教育の効果が得られると考えられる。

そのためには、情報をブラッシュアップし現代の住宅事情に適するものとする、学習展開例と指導案を整備し、PPT資料や教材等の**使い方の説明が必要である。**

(4) まとめ

北海道は、全国に先立って住教育に取り組んでいる自治体であり、これまでも多くの自治体や専門家からの視察・ヒアリング調査を受けている。その影響もあり、近年では行政が住教育支援に取り組む事例も増えてきている。

住教育は、結果の出にくい取組みではあるが、将来的には住まいの大切さを認識できる人を育むことにつながると考えられるため、長い年月に渡り継続して行うことが望まれる。

(平成25年度道受託事業報告書より抜粋)

北海道での経験から

●ターゲットはどこか、どうアプローチするか●

家庭学習

地域での学習

学校教育

●担い手は誰か●

行政・
教育委員会

建築士会などの
専門家団体

その他

●事業費はどうするか●

稼ぐことのできる
仕組みづくり

費用がかからない
工夫

行政による
予算確保